

人の傳は、本朝高僧傳、元亨釋書以下皆之を載せず、今詳かに知る可らずと雖、西山の法華山寺に住みしよしは、風雅集卷第八冬歌の部に、「雪のいみじくふりたりけるあした、慶政上人西山に住み侍りける庵室に詠みて遣しける」とて、光明峰寺入道（道家）の、「如何ばかり降りつもるらむ思ひやる心と深きみねのしらゆき」なる歌及び慶政の之に對する返歌あり、また續拾遺集卷十九釋教歌の部に、「慶政上人住み侍りける法花山寺にて人々歌よみ侍りけるに」とて、前内大臣基家の歌もあり、風雅集卷十八釋教歌の部には、慶政自らの歌序に、「式乾門院十三年の法事に法華山寺にて唐本の一切經供養せられける時、空に音樂の聞えければ、よみ侍りける」といへるが如きによりて知らる、安藤爲章の年山打聞には、閑居の友なる書を以て、「松尾澄月房慶政上人作と存候云々」の記あり、また和歌口伝源承法眼（古寫本）に、「阿房爲相朝臣母安嘉門院越前とて、侍りける身をすて、後奈良の法花寺にすみけり、後に松尾慶政上人のほとりに侍りけるを、源氏物語かゝせん」とて、法花寺にて見なれたる人のしるべにて、院大納言典侍二條禪尼もとにきたれり」と記せり、思ふに澄月房とはこの松尾の法花山、即ち今の西芳寺中の一房の名なりしならむ、その生歿の年月も詳かならざれども、明惠上人を始め、道家、實經父子、家良、基家、家隆等の縉紳諸卿と相交はりしことは、續古今、續拾遺、玉葉、風雅、新千載、新拾遺の諸集に、相互贈答の歌を載するを見れば明かにして、その大概の時代は之を想像するに難からず、三井續燈記には、慶政なる天台の僧を、近江國園城寺の學僧なりとし、能舜法師に師事して經論を學び、西山の法華山寺に居り、文永五年十月六日寂すとあるよし、佛家人名辭書に見ゆ、思ふに此上人のことならんか、かの明惠上人が貞永元年壽六十を以て歿せしに考ふれば、それより三十六年の後、即ち文永五年に此上人の入寂せしは、少しく長壽にすぐるが如きも、然もその交友